

宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」で北大が「対面回答、

「北大の謝罪と総括」引き続き要求

「二度と戦争を起こさせない」では一致

北大生・宮澤弘幸の身分と名誉の回復にかかる問題で、6月25日、北海道大学（山口佳三総長）が初めて、当会の求めている対面回答の席に応じました。形は、これに先立つ北大による秋間美江子さん（宮澤弘幸の妹でアメリカ・コロラド州ボルダー在住）訪問の経緯等について説明する席との設定でしたが、実質は当会が今年2月22日付で求めた「申入書」、同4月14日付「質問書」に対する回答の一端と受け止められます。

もとより回答としては極めて不十分ではありませんでしたが、中で、明確な文言として「事件を風化させないように努めます」とあり、また双方応答の中では「二度と戦争を起こさせない」という一点では冤罪を許さない共通基盤として一致していることが確認されました。

添付された説明資料は退学願・復学願をはじめ10点に及び、事件の真相を究め広めるうえでも貴重な資料であることは間違いありません。

（説明資料の分析考課は、「新資料に対する考察」として8ページに掲載）

北大の「調査結果説明」は評価

北大は、学外とのかかわりを頑なに避けていました。それが昨2012年10月24日に、秋間美江子さんによる宮澤弘幸アルバムの寄贈を受け入れたのを機に動き、今回初めて、宮澤弘幸の眠る墓前に花を供え、たうえでアメリカ・ボルダーに秋間さんを訪ね、宮澤弘幸の身分と名誉にかかる説明を新たに発見した文書に基づいて行い、同じ内容を学外の組織である当会に対しても行いました。これは画期的といってよく、当会の成果としてもき

ちんと位置づけられると考えます。

これは生涯をかけて「二度と冤罪を起させるな、二度と戦争を起させるな」と訴え、いまでも労を惜しまずにいる秋間美江子さん、その秋間さんの苦悩に寄り添って励まし続けている山野井孝有・当会代表、また北大の地元にあつて北大の姿勢を質し糾し続けてきた山本玉樹・当会代表らの地道にして突出した熱意、そして会員のみなさんの広く深い盛り上げの成果であると、改めて期待かかるところです。

もちろん究極は国家権力による名誉回復と謝罪であり、開かれた窓は狭く、北大の回答はほんの端緒に過ぎません。

活動を総括し今後の方針を決定

前後して開かれた25日幹事会、26日拡大幹事会では、回答の不十分さと同時に取組みの不十分さについても、意見を交わし合いました。中でも肝心な北大における責任自覚と謝罪がなかったのですから不十分どころではないという指摘は痛く受け止めていかなければなりません。

また運動の広がりの中で、レーン夫妻にわたる取組みが弱いのではないかと指摘も数多く寄せられました。宮澤弘幸とレーン夫妻は冤罪被害の中では一心同体の関係にあり、この指摘は今後ともしっかり生かされていくこととなります。

合わせて「二度と戦争冤罪を起させない、そのためには二度と戦争を起させない」ための取り組みは、今回関係者の共通の基盤に立って、一層粘り強く、かつ最近の時勢では緊急に取り組んでいかななくてはならないと迫られます。＝2面へ続く

一方、北大では、今回新たに発見した文書を基に宮澤弘幸の冤罪事件にかかる報告書をまとめて今年度中に発刊し、やがては創立 150 年の沿革史にも生かすとの表明もしています。「風化させない」の一歩として積極的に見守っていかなくてはならないでしょう。

別項、「申入補充書」は、こうした議論を踏まえ幹事会において取りまとめたものです。当会とし

ては、2・22 付「申入書」に対する回答は、核心部分においては未だ届いていないとの認識のもとに、6・25「回答」によって明らかとなった実態を踏まえ、2・22 付申入れの本旨をより明確にするための補充書という位置づけです。

本補充書は 6・26 付で北大総長宛に郵送しました。また、また今後の折衝に支障の生じないよう双方の窓口交流についても確認し合いました。

2013 年 6 月 26 日

北海道大学

総長 山口 佳三 殿

北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の
真相を広める会

代表 山野井孝之

同 山本 玉樹

申入補充書

2013 年 2 月 22 日付「申し入れ」に関し、2013 年 5 月 27 日付で宮澤弘幸名の「退学願」など宮澤弘幸の身分と名誉にかかる 10 点の送付をいただき、6 月 25 日に貴大学において説明をいただきました。

同封の貴文書及び説明によりますと「本学といましては、退学及び復学については、ご本人の意志として尊重するとともに事件を風化させないように努めます」とあり、また応答の中で、北海道大学とわれわれは「二度と戦争を起させない」ことでは明確に一致していました。これら一致点を踏まえ、学問の府、教育の府としての責任において必ず具体的成果をあげられますよう期待いたします。

半面、同意できないというところもありますので、改めて申し入れの本旨を明かにし、正面からの回答をいただけますよう申し入れます。

記

1、外形からの事実

2013 年 2 月 22 日付「申し入れ」の時点においては、貴大学における調査（北海道大学大学文書館年報・逸見勝亮「調査報告」など）を基に、「退学願」「復学願」とも存在しないことが前提にあり

ました。今回、送付いただいた文書の原本が真真正であるとすれば、宮澤弘幸にかかる貴大学における身分と名誉の流れが外形上異なってくることは承知いたします。また決定権者が教授会ではなく、学部長で教授会は報告を受けるだけだったことも分りました。

しかし、貴大学における意思決定の手順がどうであれ、貴大学の判断によって宮澤弘幸の学籍が断たれたという事実には変わりありません。

2、申し入れの本旨

2013 年 2 月 22 日付「申し入れ」の 1、2、3 での指摘は、人生を左右する窮地にある学生に対し、このような貴大学の判断は不当だったということです。

したがって、不当な判断に基づく一切の処置を撤回ならびに謝罪し、身分と名誉を回復させられたいとの申し入れです。こと細かく項目を挙げたのは具体的な措置を願うためであり、大局を踏まえた措置を求めるものです。

3、新しい事実

今回、送付いただいた文書（写し）によって新しい事実も判明しました。宮澤弘幸は、宮澤弘幸名による「退学願」が宛名の工学部長に届くや即日即決で退学になっているのです。一片の事情確認、慰留のなかったことは明らかです。

「願」が 4 月 1 日。「指令書」が 4 月 1 日。「学籍」が 4 月 1 日。「願」に対する「許可」といいながら、実質「処分」同然です。窮地に陥った自らの学生を前に、不当な判断によって、最悪の事態に追いやったのです。

逸見「調査報告」が典拠に挙げている『日米交換船』を既にお読みになっていることと思います。ここに記録されたハーバード大学の対応を待つま

でもなく、学問の府、教育の府としてのありようを明らかにしていただきたく改めて申し入れます。

4、本人の意志

宮澤弘幸が冤罪に抗し、終始一貫、北海道帝國大學學生であることを誇りに裁判を闘い抜いたことは大審院判決においても証明されております。これが宮澤弘幸の生涯をかけた厳然たる意志です。判決書という公文書において北海道帝國大學學生であること明示されているのです。

今回送付の「退学願」は、この事実と明らかに矛盾します。この矛盾を解かずに「ご本人の意志として尊重する」とは言えるわけがありません。

また貴大学においては「退学届」ではなく「退学願」であることも分りました。願いをもって許可する。そこに自由意志がどのように保障されているのか。とりわけ宮澤弘幸の場合は冤罪による拘束下にあったのです。学問の府、教育の府として自由意志の実現は何にも増して大事と考えます。自由意志への明快な保障があつて初めて「ご本人の意志として尊重する」と言えるものと思います。併せて明快な回答を申し入れます。

5、2013年2月22日付「申し入れ」の4～5につきましては、いまなお明快な回答がありません。改めて申し入れます。

北海道大学の対面回答経過と「回答文書」について

6月25日の対面回答は、北海道大学本部（事務局）庁舎2階会議室で行われました。北大からは三上隆・副学長、井上高聡・大学文書館助教、辻邦章・総務企画部総務課長、太田裕美・同課長補佐の4人、当会からは山野井孝有・代表、山本玉樹・同、大住広人・幹事、刈谷純一・同、福島清・事務局長、根岸正和・同次長の6人が同席し、午後2時からおよそ2時間にわたりました。

北大では今回の回答にあたって、「お知らせ」あるいは「報告」という用語を使い「回答」を避けていますが、これまでの経緯と内容からいって当会としては「回答」として扱うことにします。

<「文書回答」全文>

平成25年5月27日

北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会

代表 山野井孝有 殿

代表 山本 玉樹 殿

国立大学法人北海道大学総長

山口 佳三（公印）

故・宮澤弘幸氏に係る件について

先般、秋間美江子様及び貴会から連名でお申し入れのありました故・宮澤弘幸氏に係る件については、宮澤氏のご家族である秋間美江子様には、平成25年

5月30日（米国現地時間）に本学職員から直接ご報告をいたしますことをご知らせいたします。

なお、秋間様から貴会にも説明するよう要請がありましたので、下記のとおりお知らせいたします。

記

故・宮澤弘幸氏に係る件について、工学部において、宮澤氏が在学された当時の書類を調査し、下記の公文書を新たに確認いたしましたことをご報告いたします。

新たに確認された公文書

- ・退学願及び指令書 [資料2]
- ・復学願及び指令書 [資料4]
- ・死亡届 [資料5]
- ・退学(死亡)伺 [資料6]

これまでに確認されていた公文書

- ・学籍簿 [資料1]
- ・教授会議事録(退学) [資料3]
- ・教授会議事録(死亡) [資料7]

これまで、宮澤氏に係る公文書については、平成21年度に当時の北海道大学文書館長であった逸見勝亮理事によって調査され、平成22年3月に「調査報告」として北海道大学文書館年報に発表されておりますが、昨年10月に秋間様から宮澤氏のアルバムをご寄贈いただきましたことから、はじめて工学部

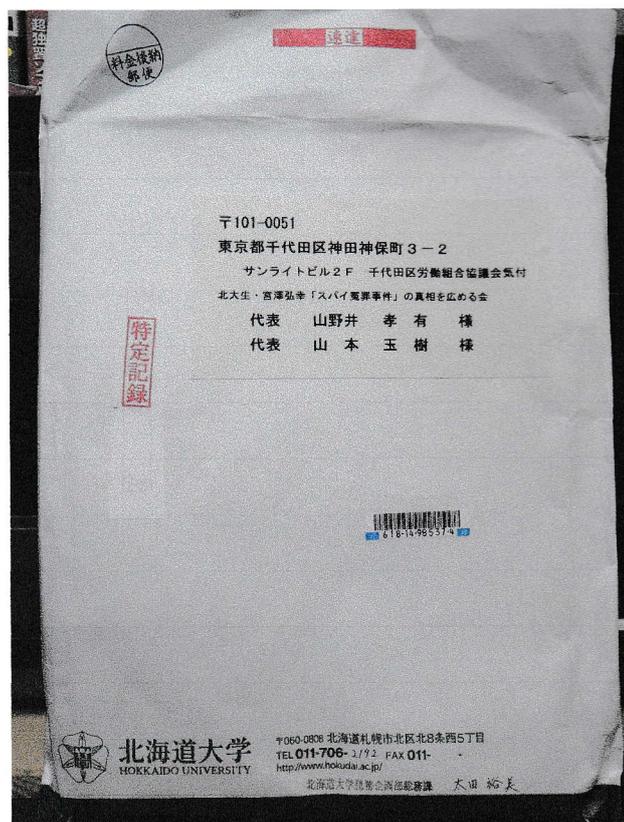
において徹底した調査を行いました。その結果、逸見文書館長の調査では確認されなかった宮澤氏本人からの退学願及び復学願、それらの事務処理に係る書類、及びご尊父様からの死亡届が確認されたものです。

これらの公文書が確認されたことから、宮澤氏の退学及び復学については、宮澤氏ご本人からの願い出により、工学部において所定の手続きにより許可されたことが明らかとなりました。本学といたしましては、退学及び復学については、ご本人の意志として尊重するとともに、事件を風化させないように努めますので、ご理解いただきたいと存じます。

【注】（当会による注）

添付文書は、学籍簿（折り畳みの内面に履修科目と成績）、指令書・退学願、昭和十七年度教授会記録、指令書・復学願、死亡届・死亡診断書、退学（死亡）伺、昭和廿一年度教授会記録の7種で文書の枚数は計10点。

以上は各関連簿冊（計7冊）にそれぞれ綴じ込まれており、それぞれが綴じ込まれた状態でのカラー写真と、個別に分けてのカラー複写及び白黒複写で提示されている。



「真相広める会」宛に届いた回答の封筒

<■対面回答ならびに応答■>

対面回答では、冒頭、本会代表の山野井孝有氏と北大副学長の三上隆氏から各発言があり、その後、添付文書の個別説明に入り、当会の申入れに応じ、一問一答式で行われました。（以下要旨）

【山野井孝有・代表】今日の機会を設けてくれたことに感謝します。秋間美江子さんから北大の訪問結果を電話で聞いたが、わざわざボルダーまで説明に赴いたこと、ご苦労さまでした。

「真相広める会」（以下「会」）について誤解があるといけないので説明する。「会」は、秋間さんが三上副学長に説明したように、北大とケンカすることが目的ではない。スパイとされた宮澤弘幸の家族として70年以上も苦しんで85歳になった秋間美江子さんが、「スパイの家族」という人生を終わりにするためにアルバムを寄贈したいということで、昨年10月新田副学長にアルバムを贈り調査を求めた。

この経過を毎日新聞のOBなど友人たちに話したところ、秋間さんの苦しみを和らげてあげるためにも宮澤事件を広く知ってもらい、そしてこうした事件を繰り返させないことを目的に「会」を結成しようとなった。さらに戦争への道を進むかのような最近の動きに、二度と戦争を起こさせないことが何よりも大切だということになった。

東京では私が代表に、北海道では山本玉樹さんが代表になり、全国から多くの会員が参加している。「二度と戦争を起こさせない」という一点では一致できるわけで、北大とケンカしたり追い詰めたり、勝った負けたというのではなく、北大と共に考え、一緒にやっていきたい。

【三上隆・副学長】（大きくうなずき）われわれもケンカする気持ちは毛頭ない。私は工学部の出身で2006年から2010年まで工学部長を務めた。

本件について新田副学長から再調査を打診されたので、上田誠吉弁護士の著書、逸見、井上報告書などを勉強した。その結果、逸見、井上報告には推測の個所があるので、客観的に再調査し事実を調べるべきだと考え、工学部に思い込みなしで再調査を指示した。

北大にはかつては大きな学科には（個別に）図書館があったが現在は集約している。そこにある未開封の資料も開けた。教務課、総務課には議事

録調査を求め、当時の電気工学科は現在は情報科学研究科となっているので、そこも調べてもらった。銘記されていない古い段ボールも開けた。その結果、新たな資料が見つかった。

そこで、アルバム寄贈で徹底調査のきっかけを作ってくれた秋間さんに報告しなければいけないと思い、秋間さんは外国にいらっしゃるが、これまでずっと苦勞されており、これは現地に訪ねるが一番と思った次第だ。

5月30日（コロラド時間）10:45～13:45の約3時間、雑談も交えて説明した。

私の現地での説明と山口総長による文書について、秋間美江子さんから、「分かりました」との返事をいただいて帰ってきた。

【山野井代表】秋間さんは電話で「退学願というが、兄が鉄格子の中で拷問を受けている時に書いたと思うと苦しい」と泣いていた。新しい資料が出たことは努力の結果だろうが、秋間さんには新たな苦しみを与えることにもなった。

三上副学長の説明に秋間さんは、謝罪がなく紋切型だと受け止めていたが、「分かりました。ご苦勞さま」と答えたと言っていた。それで秋間さんと三上副学長との話の中では、お互いに通ずるものがあつたのかと感じた。秋間さんの気持ちを北大としてどのように受け止めたかはわからないが、まず提示のあつた新しい文書などについて、担当幹事から不明点などをお聞きする。

——この後、大住広人・幹事が1点1点につき一問一答式で質したが、受けた説明の要点を以下にとりまとめて掲載する。

◇退学願について

寄贈受けたアルバムに書き込まれた宮澤さん自筆の文字との照合で自筆と判じている。秋間さんも兄の字だと言っている。退学願として学部長宛に出すのは当時の書式だった。拘置所で本人の意志で書かれたと思われるが、用紙、用具をどうそろえ、大学へどう届けられたかはわからない。

判決文で「北海道帝國大學學生」となっている相違についてはわからない。大学として学生的身分異動を司法に通知する義務はなく、司法が確認を怠ったと考えている。

願いを受け、事情調査あるいは慰留があつたかどうかはわからない。個人的な経験からは許可に至るまでいろいろあつたと思う。日付は文書の上

で願の日付に合わせたと思われる。

◇指令書について

願いを受けて学部長が許可するというのが当時の処理だった。「願 退学の件許可ス」とある。指令書は学部長から学部事務担当に指令（指示）するもので、綴じ込まれているのはいわば稟議書にあたり、学生主事、協議員ら関係する各担当者の認印が押されている。

指令書は「入学退学休学卒業ニ関スル書類」という簿冊に綴じ込まれており、「退学願」はこの指令書に添付される形になっている。

◇復学願について

筆跡は退学願と同じであり、自筆と判断している。大学としては、この復学願に「軍機保護法違反嫌疑ノ為メ退學中……無罪放免ニ相成」と記されているのを見て、初めて本件容疑を確認した。そこで学籍簿にもこの旨を明記し、復学願のコピーを余白に貼り付ける措置をとった。

◇指令書及び教授会記録について

復学願にも退学願と同じく、対応する指令書はあるが、教授会記録は見当たらない。指令書で復学を許可している昭和二十年十二月廿一日を挟んで3か月間の記録を調べたところ、指令書にあるもので教授会に報告のあるものが12件、同報告のないものが12件あつた。このうちの1件が宮澤さんのもの。有無の理由、原因についてはわからない。いずれにしても指令書を以て有効だから、学籍簿には記載されている。

◇死亡届・死亡診断書及び学籍簿について

死亡届は父・宮澤雄也名で昭和廿三年一月三十一日付となっている。秋間さんは次兄・晃さんの字だと言っている。添付されている死亡診断書では昭和22年2月22日の死亡だから1年近くも後ということになる。大学では同年2月3日発信の伺書によって措置し、教授会に報告し、学籍簿にも記載した。

遅れた理由については不明だが、復学許可の以降も授業料の納付はなく、学籍簿にも履修の記録がないことから実際には登校することなく亡くなり、大学からの照会で死亡後措置が取られたものと思われる。死亡診断書は実物。

◇文書発見の経緯について

逸見・大学文書館長による調査のときは学籍簿と教授会記録を重点的に調べ、古い書類の書架の中に見つけた。複数個所に保管されたまま未整理で内容の知れない古い段ボール等についても徹底的に調べたところ発見するにいたった。

—— □□□ ——

【三上隆・副学長】秋間さんからは「このようなことを二度と起こさないでいただきたい」と強い要望があった。私からは、宮澤事件は風化させないと伝えた。そのために、同行した井上先生に2013年度末をめどに、宮澤さんに関する退学・復学の経緯について報告書を作成してもらおう。2026年の大学創立150年の沿革史にも生かすことになるから、今回見つかった文書は大学文書館で保管すると伝えた。

【大住広人・幹事】いまうかがった説明等については持ち帰って検討し、おそらく2・22「申入書」を補充する形でまとめて重ねて申し入れることになると思うので、合わせて検討願いたい。

【山野井代表】これで終わりということではなくて、大学側としても調べるべきことがあると思うので、さらに完全なものにしていただきたい。

文書回答の中に「風化させない」と明記してあるがこれが大事なことだ。いま従軍慰安婦問題では、時代が変わっても犠牲者に対するお詫びが追及されているように、北大としてあの当時、両親が総長に救いを求めた際の対応は、たとえ戦時中であつたとしても、今考えてどうであつたかが総括されなければならないと考える。

秋間さんは電話で、「兄が鉄格子の中で拷問を受けている時、アメリカでは日本人留学生が鉄格子の中でも大学として論文を書かせ、卒業させている。東大の総長は学徒出陣する学生に必ず生きて帰ってほしいと言って送り出した。これらに比べると北大は冷たかった。私たちのような苦しみを二度と起こさせないために、北大と話し合ってほしい。三上副学長ならきっと分かってくれる」と切望していた。

秋間さんの気持ちは「会」の精神でもあり、教育に携わる三上副学長はじめ先生方の気持ちでもあると思う。二度とこのような悲劇を起こさず、戦争のない世の中にしていくことでは、我々と北大とは一致できるはずだ。

【三上副学長】(うなずいて) 当時の総長がどうい

う気持ちで「何もできない」と言ったのか、書類が何もないので分からないが、ただそれだけの会話だったとは思えない。大学は何もしなかったというが、軍機保護法は「見ざる言わざる聞かざる」という状況を作りだしていた。そのような状況下では、推測だが、逮捕理由も分からず、何の支援・救援も出来ない状況だった。宮澤さんに限らず、そうした学生に対して、大学としても社会としても何が出来たのか、教えてほしいというのが正直なところだ。

【刈谷純一幹事】私は北大の卒業で、昨年、北大社会学同窓会の会報に「クラークは『規則ではなく良心に従え』と言った」と書いた。ところがこの回答と説明を聞くと、北大は完全に規則に従っている。こういうことがクラーク精神の本拠地である北大であつたということ、いま世の中も、いつの間にか国民の総意で規則を守る風潮になっている。いまから、わたしは何をどう書けばいいのか、アドバイスをお願いしたい。

【山本玉樹・代表】丹保憲仁氏が学長に就任した後、「君はクラーク先生のことを研究しているが、何か提案はないか」という書状をもらった。私は、日本でキリスト教に基づく平和主義や反戦平和の思想を北大で教えたのは新渡戸稲造、内村鑑三であり、内村鑑三記念館設立を提案したこともあつて、1996年に新渡戸稲造の銅像が完成した。

三上副学長の「宮澤事件を風化させない」という発言は立派だ。宮澤弘幸は、弾圧と拷問に屈せず戦争につながる「偽」を絶対に認めなかった。これは北大の誇りだ。こういう人間を北海道大学は育てたということを、北大は世界にアピールするべきだ。

最近の新聞報道によると、北大は新渡戸カレッジを構想していると聞くが、そうであれば新渡戸先生の「吾、太平洋の橋とならん」との平和思想と、遠友夜学校で貧しい子供たちのために無報酬で教壇に立つ学生を育てた生き方を評価し称揚して伝えるべきだ。

宮澤弘幸は短い人生だったが、これらと並び称されるべきだ。1876年の札幌農学校創立以来のクラーク精神は矢内原忠雄、南原繁と受け継がれている。南原繁はかつて荒木貞夫陸軍大将が文部大臣となって、東大が自主的に学長を選ぶことは天皇の大権を侵すと言ったとき反論した。これが札幌農学校の流れだ。戦後、教育勅語に代わる教育

基本法を作ったのは、当時教育刷新委員会委員長だった南原繁だ。

こういう視点に立って見たとき、宮澤弘幸は正に札幌農学校の教育思想の具現者だった。「風化させない」という三上副学長の言葉に励まされる思いだ。

【三上副学長】風化させないという決意は間違はなく守っていきたい。私の代が代わっても引き継いでいく。

【根岸正和・次長】三上副学長がボルダールに行かれたことは、良いことだったと受け止める。この決断をされたのは総長なのか。またその背景について聞きたい。

【三上副学長】秋間さんは、大変苦勞されて外国にいる。気持ちを表すには文書か手紙でも可能かもしれないが、直接お会いするために現地に行くのが一番だと考えた。気丈に対応なされ、冗談も交えていたが、夜は泣かれていたのではないと思う。

【大住幹事】だったら、そこでもう一步踏み込んで、「あんどきごめんな」の一言を言っていたら完璧だった。

【三上副学長】何に対して……。

【大住幹事】あのととき北海道帝国大学として何が出来たのか（つまり何も出来なかった）と言われれば身もふたもない。その議論を認めると、再び同じ状況が起った時に、また同じ過ちを犯すことになり、戦争の犠牲者が出ることになる。何が出来たか出来ないかではなくて、当時の北大はみなさんの先輩の時代ではあったが、あの当時の対応は間違いだった、何か一つでも身を切って支援すべきをやらなかったと言うべきだ。

【三上副学長】その支援策がどうしても見当たらない……。

【大住幹事】国情が違うと言えばそうかも知れないが、アメリカ・ハーバードでは学の独立を貫いている。北大として出来なかったはずはない。しかし結果的に出来なかったことは、先輩たちの時代のことはあるが、今後は二度と同じことは繰り返さないということで明確にすべきだ。言葉としては、「ごめんな」の一言になる。

【山野井代表】大事なことは、戦前に起きた北大での事件について、戦後のどこかで振り返ることではないか。我々が調べた範囲では何もなされていない。秋間さんの電話によると、三上副学長と

は過去の苦しかったことについて語り、頷き合ったとのことだった。それでもなお、「あの時代、北大も被害者と考えるべきかもしれないが、だから仕方がないと思うことは、それは戦争を認めることだと思うの。戦争のない世の中にするという点では、三上副学長と真面目に話し合ってください」と言った。あの時代では何も出来なかったというが、あの時代でも抵抗し、戦争に反対した人がいたことは事実だ。

【福島清・事務局長】三上副学長の説明で理解できた点もある。また解明していく過程で苦しめたのではないかとも思う。両代表が言ったように、こうした事態を引き起こさないために北大として今後、前向きな態度を表明していただきたい。

【三上副学長】当時の状況、時代背景の真実をとらえる必要がある。軍機保護法の存在を抜きにして、宮澤・レーン事件を語ることは出来ない。軍機保護法を免罪符にするつもりはないが、当時の今総長もいろいろな動きや間違いもあったことと思う。総長にどれだけ情報が入っていたかも分からない。当時の（両親との）会話の状況を知りたいが、一切、記録やメモが残っていない。しかし情報収集には全力を挙げていたと思う。

【大住幹事】今後とも苦言を申し上げるが、これからの問題として「二度と戦争を起こさせない」ということを、教育の府、学問の府として明確にしてほしい。

【三上副学長】政治的な問題については、大学としての意思表示は別として、時代背景を伝えていくことによって一般の方々にも理解してもらえらると思う。そういう（戦争を起す）社会を二度と作りたくないという意味が伝わっていくならば、宮澤さん（が被った）ような（冤罪）事件を起こさないことにつながると思う。

【大住幹事】そうであれば結構であり、これからもきついことを申し上げるが、率直に意見交換できるような場を維持していただければと考える。ご賢察願いたい。

【福島事務局長】これまで太田課長補佐を窓口として連絡させていただいた。

さる2月26日に当方の山野井、山本両代表と根岸事務局次長が総長宛の2・22「申入書」を手渡そうと訪問した際は、物置のような部屋でお茶いっぱい出されずに応対されたと聞いた。

今日は三上副学長はじめみなさんが、立派な会

議室で、こうして私どもの任意団体である小さな会に対しても対応してくれ、戦争を知っている両代表からの話を真摯に聞いてくれたことは、北大として真面目に対応しようとする姿勢として受け止める。この精神を忘れずに北大としてさらに踏み込んで表明してほしい。

今後ともこうして会うなり、正式な回答をいただくなどの対応をお願いしたい。

【山本代表】かつては、学長室などへも気軽に伺うことが出来ていたので、2月26日の対応には驚いた。世界と日本の世の中に対して恥ずかしくないのかと感じた。今後は、今日のような関係を続けていただきたい。

かつてヘルマン・ヘッカー先生は不当に拘束された学生を見舞うことに（周りから）反対されたとき、「教え子が逮捕されているのを見舞うことがどうして悪いのだ。バカなことを言うな」と、怒鳴りつけた。これが本当の教育者だ。こういう精

＜■新資料に対する考察■＞

——退学・復学願と北大の責任——

退学届はないという北大の通説が、一転して退学願・復学願があった、となった。これによって北大の説明は「本人からの願い出により、所定の手続きにより許可された」として、北大には手続き上の瑕疵なく、「本人の意志を尊重した」のだから何等の責任もない、となった。

だが、この主張は当たらない。むしろ、退学願と復学願の発見によって北大の責任がより明らかになり、より重くなったとさえいえる。

その1は、退学願と重ね合わせて発見された「指令書」によって、当時の北海道帝國大學では、学生の退学・復学等の処理は学部長の専決事項であり、願いを出させて許可する仕組みだった。つまり「届け」を受理するのではなく、出処進退の決定権は学部長にあったわけで、正しく天皇の大学が学生の身分・名誉について決定を下す仕組みであった、とわかった。

その2は、「願い出」の理由が、復学願の発見によって実は「軍機保護法違反嫌疑ノ為メ」だったとわかった。退学願の時点では「家事上の都合」という曖昧な表記だったが、実際には明確な理由が隠し込まれていたことになる。もともと「家事上の都合」とか「一身上の都合」という慣用句

神を受け継いでほしい。

【山野井代表】私ども率直に意見を申し上げ、また三上副学長も真面目に対応いただいたことに感謝する。この問題は大事だ。二度と戦争のない世界にするために努力してほしい。

最後になるが、ボルダークの秋間さん宅で、三上副学長はゲスト・ブックに署名されたと聞いた。そのことを秋間さんは喜んでおり「遠いところをご苦労さまでしたと、お伝えください」とのことだった。そして「三上先生なら山野井さんたちと前向きに話し合うことができるでしょう」と言った。さらに「山野井さんの著書『いのち五分五分』と山野井泰史とその妻・妙子がグリーンランドの大岩壁に挑戦したときの記録のDVDとを三上副学長に贈るように」と言われたので、贈ります。

【三上副学長】筆不精なので、秋間さんにお礼状を出すのは何時になるか分からないが、頂くことにする。ありがとう。

は本当の理由を隠したり、表に出さないよう強要されて書く表記と知られている。

その3は、指令書の発見によって、退学処置が即日即決で下されたとわかった。「願い出」が4月1日で「許可」が4月1日。北大の説明では単に書類上の日付合わせだと釈明しているが、同様の復学願に対する許可が13日後であった事実からも退学願が「待ってました」とばかりに処理されたことが明らかだったとわかる。

これはそのまま、北大が窮地にある自らの学生の進退について何等の事情調査も慰留も、最後の意志確認さえもしていなかったことを証明している。これは大学の手続き上云々ではなくて、学部長（つまり大学）の専権によって宮澤弘幸という一人の学生の学籍が断たれたという事実に他ならない。

全く同じ時期、敵国アメリカで同様の事態があり、その時ハーバード大学の学生だった鶴見俊輔が不穏なる敵国学生ということで検束され収容所に拘束されていた。

おりから卒業年後期の試験中であり、ハーバード大学の担当教師が収容所を訪れての試験を行ったうえで、それでも足りない単位分を拘束下で仕上げた論文を以て認定し、卒業に至っている。

片や何等の救援の手を延べず、学籍を断っておいて「本人の意志尊重」という。どちらが学問の

府、教育の府としての責を果たしているのか。どう見ても一連の行間に「退学願」を欲しかったのは北大当局という影が透けて見える。8日後の4月9日に起訴されている。

その4は、本人の意志尊重ということであれば、本人は終始一貫、北海道帝國大學學生であることに誇りを持ち、その名において冤罪裁判を闘い抜いている事実がある。それは判決書によっても裏付けられ、初公判の人定尋問と一致しているはずであり、起訴状記載と齟齬しているはずもない。

半面、拘束下で「退学願」を書いたとすれば完全監視の下であり、検事の許可なしに塀の外から接触することも、塀の外に書類を持ち出すことも不可能に近い。仮に書いたとすれば、当然、検事は「願」の存在を知ることになる。

この矛盾に合理的説明がつかない限り、鉄格子

の拘束下ながら自由意志で「願」を書いたとの北大の説明は証明されないことになる。学問・教育の府として、司法の怠慢に転嫁してやり過ごすことはできない。

やはり原点は、「復学願」に強く明記された「軍機保護法違反嫌疑ノ為メ退学中ノ処昭和二十年十月十日無罪放免ニ相成」にある。この無念と憤怒に思いを致して、北大は自らの責任を明らかにし宮澤弘幸の北大生としての誇りある身分と名誉の回復に努めなければならない。

文書発見にかかる課題はいくつもある。最たるものは筆跡鑑定だが、これは素人鑑定が通るわけでもない。各文書にはそれぞれ数多くの押印が残されており、それらの意味するものをにわかには検証し得るものではない。合わせて専門家の目を仰ぎながら検証に努めていくことになる。

ハロルド・レーン、ポーリン・レーン夫妻墓参

6月26日の拡大幹事会開催前、幹事会メンバー（山野井孝有、山本玉樹、大住広人、刈谷純一、福島清、根岸正和）は、札幌・円山墓地に眠るレーン夫妻のお墓にお参りした。

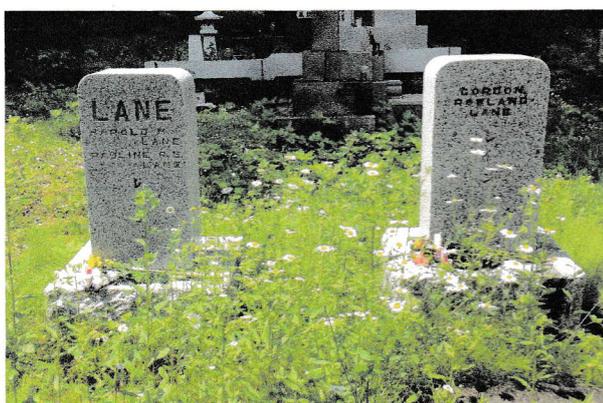
繁る夏草に囲まれたレーン夫妻の墓碑（左）の裏には、次のように刻まれている。

HAROLD M LANE BORN TAMA IOWA OCTOBER.7.1892 DIED AUGUST.7.1963

PAULINE R S LANE BORN KYOTO JAPAN DECEMBER.7.1892 DIED JULY.16.1966

右は夭折したレーン夫妻の息子・ゴードンの墓碑。

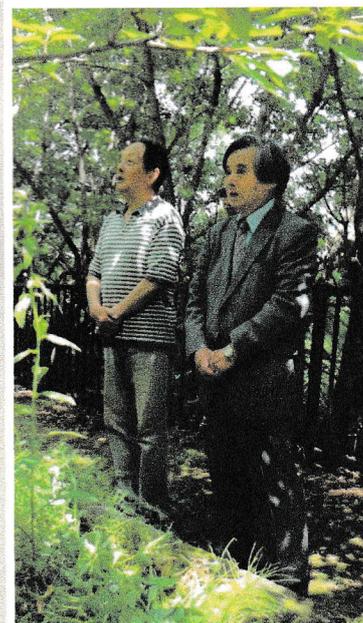
最後に、山本玉樹、刈谷純一両北大OBが、蛮声張り上げ北大恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」を献歌した。



明治45年度恵迪寮寮歌
横山芳介君作歌
赤木頭次君作曲

都ぞ弥生

一
都ぞ弥生の雲紫に
花の香漂ふ宴遊（うたげ）
の筵（むしろ）
尽きせぬ春に濃き紅や
その春暮ては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに
燃えなん我胸想ひを載せ
て
星影冴かに光れる北を
人の世の
清き国ぞとあこがれぬ



北大に対する要求と秘密保全法阻止へ

中間総括と今後の活動方針—拡大幹事会への報告

北海道大学との「対面回答」翌日の26日、午後1時30分から札幌・エルプラザ2階会議室で「拡大幹事会」を開催し、北大の回答内容を報告した後、幹事会で討議決定した北大への「申入補充書」、中間総括と今後の活動方針を提起しました。参加者は、幹事会6人に加えて会員12人、当日参加7人でした。

今後の活動について、幹事会は、「北大の謝罪と責任追及」「今秋の臨時国会に提案される動きが高まっている秘密保全法阻止」の2課題について、「真相広める会」として運動をさらに広めていくことを提起しました。幹事会の報告と方針に対して、北海道大学の謝罪と総括、さらには戦争に協力した責任の追及、レーン夫妻への弾圧をアメリカにも広める、北大関係者の世論喚起、宮澤弘幸とレーン夫妻顕彰の銅像建立、今後の運動の方向を北大謝罪要求に集中を——等の意見が出されました。これらの意見を踏まえて、幹事会としてさらに運動を発展させていく方針です。

今年1月、雪の中で発足した「真相広める会」は、緑したたる6月の札幌で、これまでの足跡と運動の前進を確認し、新たな第一歩を踏み出しました。以下、中間総括と今後の方針です。



結成集会（2013.1.29・札幌）以降の活動の中間総括

1、「真相広める会」結成の前提と目的

宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」は、国家権力の犯罪である。その意味で、宮澤弘幸とその家族及び北海道大学は被害者である。しかし国に対する再審請求は現時点では不可能に近く、冤罪を晴らす道は閉ざされつつある。

北海道大学は、自らの学生が当時の国家権力によって「スパイ」と断罪されたことに対し、いかに戦時下であったとはいえ、抗議・抵抗しなかったし、戦後もその総括の上に、宮澤弘幸の名誉回復の努力を怠ってきたことは事実である。

宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんは、高齢である

ことから、手元で糧としてきたアルバムを北大に寄贈し、宮澤弘幸の名誉回復を求めている。さらに、再審請求による冤罪晴しができなくても、「私のような「スパイの家族」を二度と作らないでほしい」と切に願っている。

以上を踏まえて結成した「真相広める会」の目的は、会則第2条である。

第2条（目的）本会は、北海道大学の学生だった宮澤弘幸さんが軍機保護法（スパイ罪）で投獄された冤罪事件を糾し、北海道大学に退学撤回による名誉回復をもとめるとともに、二度と国家による非道が起らないようにするため秘密保全法の立法策動を阻止することを目的とする。

2、これまでの活動実績

①先人たちの活動

「真相広める会」結成以前に、「宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』」に関しては、以下のような粘り強い怒りの告発があった。

☆宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんは、夫・秋間浩さんに支えられて「スパイの家族」として名乗りを上げ、1986年当時から国家秘密法阻止の行動に立ちあがり、現在も訴え続けている。

☆秋間浩さんからの手紙（1986.11.9 付）を受けた上田誠吉弁護士は、真相究明に立ち上がり、徹底した調査に基づいて「ある北大生の受難—国家秘密法の爪痕」（1987年9月28日・朝日新聞社刊）、「人間の絆を求めて—国家秘密法の周辺」（1988年7月20日、花伝社刊）等を発行し、社会に訴えた。

☆北海道大学講師の山本玉樹さんは、上田弁護士とともに調査活動を行い、いち早く、宮澤弘幸の名誉回復と謝罪、宮澤弘幸顕彰碑建立の提案を行った。さらに今なお「遠友学舎クラーク講座」を開講し、クラーク精神の意義を訴え続けている。

☆藪下彰治朗・朝日新聞記者、NHKの庄司清彦、正亀賢司記者。北海道新聞の井上雄一記者らジャーナリストが宮澤事件を発掘し報道を行った。

☆山野井孝有さんは、息子の登山事故を契機に知り合った秋間美江子さんを支え励まし続け、北大に謝罪と総括を求める運動を提起した。

以上のほか、関心を抱いて注目していた多くの北大OBのみなさんがいた。しかし上田誠吉・弁護士、藪下彰治朗・朝日新聞記者は活動半ばで、すでに世を去った。今なお元気で訴え続けている秋間美江子さんの姿勢と努力に敬意を表し、亡くなった先人たちの努力を讃え、その志を受け継ぐことを確認しておきたい。

②主な活動記録

◆2012年

10.24（北海道大学）・秋間美江子さん・山野井孝有さん、北海道大学へ宮澤弘幸さんのアルバムを贈呈し、名誉回復を要請

11.12（常圓寺）・秋間美江子さん・山野井孝有さん「北海道大学訪問報告会」

11.24（武蔵境）・「謀略」「三鷹事件の真実にせまる」合同出版記念の集いで山野井孝有が宮澤・レ

ーン事件を訴える

12.8（東京文京区民センター）・新聞OB九条の会主催「お話と望年の夕べ」で、山野井孝有が宮澤スパイ冤罪事件訴える

12.8（札幌エルプラザ）・「宮澤・レーン事件の真相究明と名誉回復を求める会」で山本玉樹代表が講演

◆2013年

1.24（文京区民センター）・新聞労連春闘臨時大会で山野井さんが宮澤スパイ冤罪事件を訴える

1.29（札幌エルプラザ）・「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相広める会」結成集会

2.4 「会報」第1号発行①宮澤弘幸さんの名誉回復と秘密保全法阻止へ②会則全文ほか

2.22 持ち回り幹事会で北海道大学への「申入書」を確認、決定。

2.23（常圓寺）・「宮澤弘幸追悼・顕彰 秘密保全法を考える集い」◇「スパイ冤罪 宮澤・レーン事件 真相を知ってほしい」パンフレット、3000部完成

2.26 北海道大学へ「申入書」手渡す。山野井孝有、山本玉樹両代表、根岸正和事務局次長

3.1 「会報」第2号発行①北海道大学へ「申入書」手渡す②「申入書」全文③2.23 宮澤弘幸追悼・顕彰、秘密保全法を考える集い

3.2（京都弁護士会館地階大ホール）・京都弁護士会主催シンポジウム「私たちの知る権利が危ない！」～秘密保全法制の危険性と問題点～ 大住広人幹事が出席して「宮澤スパイ冤罪事件」について発言

4.13（文京区男女平等センター）新聞労連第34回JTC記者研修会で宮澤スパイ冤罪事件（山野井）と秘密保全法阻止（大住）を訴える

4.14 山野井、山本両代表名で山口佳三・北大総長に「質問書」郵送

4.17「会報」号外発行①新たな事態、北海道大学に「質問書」送付②質問書全文③山野井代表「宮澤弘幸スパイ冤罪事件」で講演

4.18 山野井、山本両代表名で山口佳三・北大総長に「糾明書」郵送

6.4（渋谷勤労福祉会館）「秘密保全法×盗聴法」危険な社会！6.4シンポジウムでパンフ30部宣伝

6.12 「会報」号外発行①北大、秋間美江子さんに「説明」②拡大幹事会開催案内

③組織状況

・会員の現状（6月30日現在=223人）

都道府県別内訳 北海道=67、東京=52、千葉=26、埼玉=22、愛知=19、山梨=11、神奈川=10、大阪=2、富山=2、福岡、宮崎、京都、新潟、高知、群馬、和歌山、兵庫、岩手、茨城、静岡、鹿児島=各1

・収支報告 <会費>223個人・団体から 709,420円、<諸経費差引残>600,081円（宮澤・レーンパンフ会計は、別途集計中）

④マスコミ報道

昨年10月に秋間美江子さんが北海道大学にアルバムを寄贈した際以降、北海道新聞、毎日新聞、朝日新聞、NHKが機会あるごと、北大と「真相広める会」の動きを報道している。こうした報道によって、北海道大学に影響を与えたことは間違いなく新聞報道で集会を知って参加した方もいるので、報道の意味は大きい。

国政の諸問題についてのマスコミ報道にはさまざまな批判があるが、今後とも本件に関する情報を公開すると同時に、戦争と平和に関する問題について、積極的な報道を期待していく。感謝と激励をこめ、昨年10月以降に報道された各記事を記録しておく。

◆2012年

10.24 NHK 北海道ニュース「秋間美江子さん北大訪問へ」

10.25 北海道、朝日、毎日各紙北海道版が、秋間美江子さんの北大へのアルバム寄贈と名誉回復申し入れを報道

11.2 NHK「おはよう日本」（全国放送）「宮澤・レーン事件 北大生・失われた青春」

11.26 十勝毎日新聞「かちまい論題=坂本和昭」が「宮澤・レーン事件」

12.30 ほっかい新報「秘密保全法の阻止は急務—北大生宮澤弘幸さんスパイ冤罪事件を考える」

◆2013年

1.13 毎日新聞北海道版「北大レーン・宮澤事件広がる再検証の動き」

1.15 「不屈」（治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟北海道版）「宮澤弘幸さんのスパイ冤罪事件を訴える 12.8 集会」

1.29 NHK 北海道ネットワークニュース 845「宮澤・レーン事件で名誉回復を」

1.30 朝日新聞北海道版「レーン・宮澤事件、名誉回復へ市民団体、北大生の退学撤回要求」

1.30 北海道新聞「早期の名誉回復誓う—レーン・宮澤事件 団体が設立集会」

2.2 しんぶん赤旗北海道版「旅行話でスパイ冤罪、懲役15年、真相広める会札幌市で設立」

2.7 十勝毎日新聞「宮澤さんの名誉回復を—スパイ疑惑事件、真相広める会集会」

2.20 しんぶん赤旗東京版「戦前の北大生スパイ冤罪事件、23日に集会開催」

2.22 北海道新聞コラム「まど」「スパイの汚名」（井上雄一）

2.24 北海道新聞「退学撤回、名誉回復を一宮澤弘幸さん事件『真相を広める会』北大に26日要請」

2.24 しんぶん赤旗「秘密保全法許さない—北大生スパイ冤罪事件で集会」

2.26 十勝毎日新聞「退学処分撤回申し入れ確認—宮澤弘幸さん追悼の集い」

2.27 北海道新聞「退学撤回、北大に要請—スパイ冤罪 故宮澤さん支援者」

2.27 毎日新聞北海道版「レーン・宮澤事件、名誉回復と謝罪を一支援団体、北大に申し入れ書」

3.1 週刊金曜日「宮澤・レーン事件の真相広める会、北大に申し入れ書」

3.1 山岳雑誌「岳人」「冤罪に倒れた岳人、宮澤弘幸」（寺沢玲子）

3.15 新聞OB九条の会ニュース「宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』真相を広める会が発足、パンフレット発行、ぜひ読んでほしい」

3.31 東京フレンド第28号「北大のレーンさんを知っていますか？」

4.6 毎日新聞東京版「戦中スパイ疑獄『レーン・宮澤事件』『秘密保全』危険性知って—弁護士ら名誉回復へ活動」

4.18 毎日新聞北海道版「レーン・宮澤事件、北大生の『退学願』発見—副学長、遺族に報告へ」

4.19 北海道新聞「冤罪・レーン・宮澤事件—退学願あった—北大、遺族に連絡」

5.1 極秘通信（秘密保全法に反対する愛知の会）ニュース「『軍機漏えい』のでっち上げ—宮澤・レーン事件を忘れるな」

6.1 毎日新聞北海道版「北大復学願は『兄の字』—スパイ冤罪事件、米在住の妹話す」

今後の活動方針

1、北海道大学に謝罪と総括を要求

1面、2面掲載のように、北海道大学は「真相広める会」に対し、宮澤弘幸に関する再調査結果を報告した。しかし2.26「申入書」の核心である北海道大学として宮澤弘幸を守らなかったことに對する謝罪と総括については未回答である。

従って、6.26付で送付した「申入補充書」（2面参照）に関して、引き続き回答を求めていく。どのように回答させるか等については、今後幹事会で検討して対処していく。

2、秘密保全法阻止の活動

秋間さんは「日本が戦争をしない国としてこれからもあってほしいのです。これが、私の願いです。そのために活動してください。私も残された人生をかけ、日本が戦争をしない平和な国であってほしいとの願いを込めて……。みなさんありがとう。私も頑張ります」と、訴えている。

ところが安倍政権は、秋の臨時国会での上程を目指して水面下で「秘密保全法」の法案化準備を進めていると報道されている。参院選結果によっては、憲法改悪を目指した動きを一気に加速させ

る危険性もある。すでにその一環であるいわゆる共通番号法（正式名「行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律」と関連法が5月24日の参議院本会議で可決、成立されてしまった。

「真相を広める会」パンフで東海林智・記者が提起しているように、自民党は、集団的自衛権行使を明言している「国家安全保障基本法」も成立させようとしている。

しかし1980年代の「国家秘密法」反対運動と比較して、世論もマスコミも関心が低いのが現状だ。こうした中で、「真相広める会」会則第2条にある「二度と国家による非道が起らないようにするための秘密保全法の立法策動阻止」のために、できる行動を起こしていく。

「真相を広める会」としての活動を発展させればさせるほど、財政面での検討も必要になる。一番の収入源である入会金は、入会時の一回限であるため、重ねて会費を集めるのは無理がある。そこで、運動方針を明確にして、目的を明示したカンパを訴えることを検討する必要がある。

ともあれ「真相を広める会」に結集していただいた220余人のみなさんに訴えて協力を求めていくことを考えたい。

<拡大幹事会での意見> (要旨)

○北大が謝罪しないのには、文科省の圧力があるのではないか。そうだとすれば、北大は戦前と何も変わっていないことになる。

○逸見さん（元・大学文書館長）が調べてないと言っていたのに今回新たな資料が出てきたというのは釈然としない。これで終わりだと逃げるとではないか。レーン先生の問題も含め、北大は隠し続けている。これらをもっと掘り下げていく必要がある。新資料で終わりにしてはならない。

○私は北大入学後、レーン先生の家で英会話を習いに行った。実際はケーキを食べに行ったのだけど（笑み）。当時、レーン夫妻が戦前に弾圧されていたとは全く知らなかった。そのことをひとことも言わずに迎え教えてくれたことを、いま思うと無知は罪だと思う。

○逸見、井上リポートを読んでいるが、描かれている宮澤弘幸のイメージが両者で大分違う。そこ

にどう手を加えて次の報告書が書かれるのか。手放して見ているわけにはいかない。

○宮澤弘幸さんやレーン先生らを顕彰するのは大事なことだ。事件当時にレーン先生の官舎があった、いまは雑木林となっている場所を小公園にして顕彰碑を建てるのがよい。それができれば北大の「風化させない」が口先だけでないと受け止められることになる。

○北大も戦争遂行に協力させられてきた。そのことに対する真摯な反省を求めべきだ。北大125年通史を見ると自分たちも被害者だったといっている。だが戦後に、一人も公職追放者が出ていない。抵抗した人もいたはずだ。この事件もその一つだ。過去を検証の上、顕彰することが大事だ。

○この事件は「レーン・宮澤事件」だと思う。特高はレーン先生を中心とした教育は危険だとして弾圧したのだ。上田誠吉弁護士が最も苛酷な目にあつた宮澤さんを取り上げたのにはそれだけの意味があるが、レーン先生夫妻にも、もっと目を広

げていくべきだ。レーン先生を支えたキリスト教会関係者もたくさんいる。またレーン先生が冤罪の被害者であることをアメリカ世論にもアピールすることを考えるべきだ。そして運動は足元が重要であり、北大の世論が大事だ。

○ターゲットを絞り込むことが肝心だ。北大が謝ろうとしない背景には何かがある。北大副学長が対応の中で「うなずいた」ことの意味は小さくない。公式には、大学も組織だから謝れと言われても謝れないのだろう。それよりも風化させないために、北大OBが中心になって顕彰の碑を造り適切な碑文を刻めば、それを見た人はもっと知りたいということになる。

○宮澤弘幸さんを知らない人は多いが、レーン先生を知っている人は多い。真相を広めるためにはレーン先生と一緒にやるのがよい。国際的にも広げられる。北大副学長がうなずいても握手しても何にもならない。事実を認めて、当時やったことは間違いであったと現在の学長が認め、文書に署名したら、初めていい人だと言える。

○北大も70年以上も前のことを文書で謝罪するのは難しいと思うが、うなずくだけでもこれまでにない進歩だ。さらに一歩進め、顕彰あるいは記念碑のようなものを建てるのは意義ある。また会の名称にもレーン先生の名前を加えるべきだ。

○北大の学長も公務員だ。公務員は憲法を守る義務がある。それなのに平和を守る問題について言えないのは情けない。

○世論の中に広めることが現実問題だ。結成集会に参加した北光教会事務局の方はこの問題に積極的に取り組めなかったこと反省していた。遠友学舎のクラーク講座で山本先生は12年にわたってこの問題を訴えてきた。その粘り強い運動が、北大の対応を変えた。世論がなければ変わらなかったと思う。マスメディアの力も大きい。

広める会の宮澤パンフを20冊、その7割は20歳代の人に届けた。その中で読んでくれた小樽の人から「僕は北大ではなく早稲田だが、(今まで知らなかったことが)恥ずかしい。北大だけでなく道民として運動を起こすことが必要だ」と言っていた。この会は誇り高く持続させるべきだ。

○権限がないからというのが官僚的な言い方やり方だが、人間としてどうかという問いかけが必要ではないか。

□本会代表からのまとめ□

北大は今回、「風化させない」ことを明確に約束した。今後、風化させないために北大として何をするか注目していくが、北大の謝罪と総括は、その最も大きな問題として、引き続き求めていくために「申入補充書」を出した。

宮澤弘幸とレーン夫妻らの顕彰碑建立は、有意義で大きな目標であり、とりわけ北大内部のみなさんが本気で考えてくれると力強くなる。実現不可能ではない。そして1月の結成集会でも今日も北大OBのみなさんがたくさん参加されたことに心から感謝する。

だが会場で議論しただけでは意味がない。レーン夫妻への弾圧にも視点を据えた運動を広めることも含めて、具体化に努めたい。20数年間、この問題に取り組んできた山本玉樹代表と今日お集まりの北大OBのみなさんが核になって、何ができるか、何をすべきかについて、北大の足元でさらなる活動を具体的に起こしてほしい。

もちろん札幌以外のわたしたちも直ちに駆けつける。「言いつばなしではだめだ」を合言葉としたい。本日はありがとうございました。(山野井孝有)

<2013年6月札幌シリーズ全日程>

24日(月)幹事会 15時~17時=北海道クリスチャンセンター◇25日(火)北大による対面回答と応答 14時~16時=北大本部庁舎。幹事会 17時~19時=北海道クリスチャンセンター◇26日(水)円山墓地にレーン夫妻墓参。拡大幹事会 13時30分~17時=エルプラザ

【編集後記】昨年暮以来、この運動に関わって痛感しているのは、宮澤弘幸さんが身をもって抵抗した軍機保護法から戦争への道が、70数年経た現在、再び日本を覆っている雰囲気だ。同時に国立大学法人化された大学が文部科学省の支配下にある現実の一端を知った。こうした流れを阻止すべく秋間美江子さんの苦悩に寄り添って北大に謝罪を求める運動を起こした山野井孝有さん、一貫してクラーク精神を説き続けている山本玉樹さんと二人に触発されて運動に参加した人々の熱意を知った。三上副学長はじめ北大とOBのみなさんが北の大地から「二度と戦争を起こさせない」行動の先頭に立つことを願う。同時に秘密保全法をはじめ戦争へつながる策動阻止の運動を発展させたいと思う。(事務局長・福島 清)